

Malebranche の情念論

——情念の並列化から立体化へ——

萩原茂久

フランスの十七世紀において、もしデカルトの情念分析論が重要な書物であるとすれば、マルブランシュ Malebranche の情念分析論はそれと同じくらいか、あるいはそれ以上に意味の強調されるべき著作だといえるだろう。前者は1649年に独立した論の形で刊行されたが、後者は1674年から75年にかけて出たマルブランシュの組織的な哲学書 *De la Recherche de la Vérité* (六つの書から成る) に第五の書として収められた形で世人の目に触れるようになった。これら二つの同じ主題をもった論文が、約三十年の間隔をもって世に出たのは意味深いと私には思われる。情念に関する考察は十七世紀のモラリスト的文人たちの好奇心を刺激する、当時の普遍的なテーマの一つであったにはちがいないが、これらの代表的情念論はサロンにおける議論のリード役であったと同時に、その集大成であったと想像しても、文学的資産を共有する傾向をもつ時代の風潮からして、けっしてのはずれなものとはならないだろう。

さて、デカルトの情念論が存在しなかったならば、マルブランシュのそれも存在しなかったであろうと考えるのは正しい。しかし、マルブランシュを読めばデカルトがいっそうよく理解できるからといって、後者にカルテジアンとしての存在理由だけを認めるのは、酷でもあり、また正当な評価を遠ざかることにもなるだろう。やはりデカルトの情念論は

十七世紀前半を総括する意味をもち、マルブランシュの情念論には十七世紀後半の意義を代表するものがあると、私は考えたいのである。

デカルトの *Passions de l'Âme* からマルブランシュの *Des Passions* への移行において一般に気づかれることは、論述のしかたがより精緻になり、より組織的になり、情念全体が一つの建築物のように積みあげられて一種の立体化を目ざしていることである。また、精気や血液の脳や心臓や全身の筋肉にかかわる生理心理的機械論による叙述も、ハーヴェイその他による当時の科学的水準から見て誤りであろうとも、デカルト以上に詳しくなされているという印象は否定できない。そのほかマルブランシュの情念論の、いやそれを含む彼の哲学書全体の倫理的・神学的色彩を忘れることはできない。真理探究をはばむ原因、迷妄のみなもととして情念を考え、賢明に処理する道を示そうとするそのひたむきな態度は、大きな反撥を感じながら読む読者にも伝わってくるだろう。

デカルトの情念論を読むとき、その種の心理生理的機械論と倫理的的色彩とを除こうとつとめながら読むように、マルブランシュの情念論を読むさいにも、そのような読みかたをすることが真に妥当な手づきであるかどうか、私には簡単に判断できない。しかし、情念を分析するのはその効用、あるいはその適

切な阻止や消去に伝統的な目的はあるとしても、少なくともその中中には純粹で知的な探究心が燃えていることは感じとれる。それはちょうど十七世紀の、とりわけ後半の Roman précieux,あるいは Nouvelle galante と呼ぶことのできる小説群が、倫理的目的をとりつくろいながら、その実、人間たちが情念におぼれる現実を展開して見せる心理分析に、現代からは考えられないほどの重みをかけていた現象と相呼応するものではないか？ そう私には考えられるのである。

「不完全情念」 *Passion imparfaite*

デカルトの情念論を独創的でもあり、同時に問題のあるものとしたのは、Admiration を情念の第一に据えたことであるのは周知の事実である。彼によって選ばれた六つの「本源的情念」*passions primitives*—Admiration, Amour, Haine, Désir, Joie, Tristesse のうちの、それは最初の位置を占める。「突然の驚き」*subite surprise*⁽²⁾を意味する Admiration があらゆる情念の最初のものである理由は、「その対象がわれわれにとってよいものであるか、あるいはそうでないかを、われわれがほんの少しでも知るまえに、起こりうるのであるから」⁽³⁾だが、デカルトはここで、「～と私には思われる」という表現によって、この考え（それが情念の最初のものであること）が自分独自の説であることの思いと、いっぼう断定へのためらいとを同時ににじみ出させている。新しいもの・未知なもの・過去に受けた印象を絶するものに対するこの知的認識は、デカルトによれば生理的機械論によって説明が不可能というものではなかった。すなわち、対象を稀で、注視するに価するものとして表象する脳内の印象がまず「驚き」の原因であることを示し、つぎには、その印象に促進され、その印象の存在する脳内の場

所につよい力で流れ、それをその場所において強化し保存しようとする精気の運動が、第二の原因であることを示す。精気はまた、そこから感覚器官を同じ状態にたもつのに役立つ筋肉の方に流れるが、印象が感覚器官によって保持されるようにするためである。

しかしながらこの情念においては、脳と精気に変化はあっても、血液と心臓には変化が起こらないことを力説しなければならなかった。すなわち Admiration は他の情念と異なり、特徴として心臓と血液とに起こる変化がみとめられないが、心臓と血液とはからだの福利にこそ大きなかわりをもっている。だからこの情念は bien も mal も目的としてもたず、ただ認知・認識に役立つ感覚器官のある脳にだけ関係をもつということになる。

そのようにして Admiration が情念の一般原則（精気——脳、〔精気——〕血液——心臓のいずれにも関係のあること）からはずれた特殊な情念であることは疑えないわけだから、マルブランシュとしてはデカルトを受けつぎながらも、みずから明晰・精緻であろうとする結果として、一つの断定をくだすよりほかなかったのだろう。すなわち、これを彼は「不完全情念」*une passion imparfaite* と名づけた。このようにして Admiration を情念の外に半歩後退させたことは、これを情念ではなく知的行為とみなしたスコラ学派と、大胆にも情念の先頭にこれを加え入れたデカルトとのあいだに、一種の妥協をはかったのだともいえる。

「不完全情念」と命名した理由について、マルブランシュはまず簡単に述べる。「なぜならそれは、福利の観念あるいは感情によって引きおこされることは少しもないからである」⁽⁵⁾引きつづき、脳の刺激されかたとか、刺激される場所とか、また精気の異常な動きのような、「生理学的」説明を加えたあとで、この情念においては対象それ自体を注視する

ことだけに熱中し、対象と主体との関係についての判断がはいつてくる余裕のないことを強調する。

「……ひとは事物をそのあるがままの姿に従って、あるいはその外観に従って、もっぱら注視するのであり、自己自身に関して注視するのではない、つまり、よいものとして、あるいはわるいものとして事物を見るのではないのである。⁽⁶⁾」

そしてその生理学的理由としては、精気のすべてが脳に向かうために、血液を動揺させるところの、心臓その他に通じている神経を刺激することがないという説明がおこなわれる。したがって、からだの他の部分すべては動くことがなく、魂〔精神〕のなかに情動が少しもないので、からだのなかにも動きはないということになる。

Admiration が「不完全情念」であるということは、個別的情念の詳述にはいるまえにすでに彼は書いているが、それは各情念において見分けられる「七つのこと⁽⁷⁾がら」sept choses を説明する部分に含まれている。Admiration はそこから除かれているが、ひとまずこの七つのこと⁽⁷⁾がらを、私なりの解釈に従って簡略化して列挙してみよう。

- 第一 感知・判断・見解（混乱した、あるいは、はっきりとした）
- 第二 意志の動き（よいものと判断されたとき対象接近の動きが決定されるが、反対の場合には決定は起こらない）
- 第三 付随感情（各情念に付随する、愛・嫌悪〔忌避〕・欲望・喜び・悲しみの感情）
- 第四 身体表出（精気と血液の各部への流れの新しい決定）（その結果としての身体表情・身ぶり・構え、など）
- 第五 情動（精気の溢出により生ずる魂〔精神〕の感じられる動き）

第六 さまざまな感情（愛・嫌悪〔忌避〕・喜び・欲望・悲しみの）（福・禍、有益・有害についての知的な見解によるのではなく、精気が脳のなかに引きおこす、さまざまな動揺にもとづくもの）

第七 内的な喜び（すべての情念にともなうもの⁽⁸⁾）

これら七つのこと⁽⁷⁾がらは、これを継時的に考えて「七つの段階」と呼べないこともない。とりわけ Admiration との比較で考えるとき、これら七つの事項はどうしても七つの段階となるのである。つまりこの情念は第一のもののもう一段階まえか、あるいはその段階が完全に達成されなかった場合だと考えれば、すじみちが通ってくるからである。

「母情念」 Passions-mères

マルブランシュの情念論のつぎの特徴は、Amour と Aversion とを passions-mères と規定したことである。デカルトの六つの本源的な情念の第二と第三に当たるものがそれであるが、Haine が Aversion に変わったことに注目しよう。私はいちおう前者を「憎しみ」と訳し、後者を「嫌悪」〔「忌避」〕と訳しておくが、二つの語はもちろん同義語である。リシュレの辞典で Aversion を引けば Haine が、Haine を引けば Aversion がまっ先に出てくるのを見れば、とりわけ外国人の私たちの、断定的な区別をしようとする衝動は水をかけられる。Aversion の用語については、デカルトの情念論のなかに見られるが、そこに一種のカギが隠されているかどうか。

それは対象がよいものか、わるいものかの場合だけでなく、美しいもの・みにくいもの場合に生ずる情念を、「愛」と「憎しみ」⁽⁹⁾からデカルトが区別しようとする項目のなか

にある。「わるいもの」に対する「憎しみ」は Haine で、「みにくいもの」に対する「憎しみ」は Horreur または Aversion とすることを提案している。「嫌悪」とか「忌避」と訳してしかるべきものだろう。

フランス語を母国語としない者の語感によって断定することはできない。しかし、Haine が Aversion に変わることによって、観念にまわりつく能動的な感情のにおいがやや弱まり、中和したのではないか？ もともと Aversion は Désir の反対概念として、スコラ哲学においては考えられていた。すなわち、「よいもの」の追求に対立する、「わるいもの」の回避、あるいはそれからの逃走である。デカルトは「欲望」Désir に反対情念を与える伝統に反抗して Aversion を抹消したが、マルブランシュがこれをよみがえらせて Amour と対立する位置に据えた。「それら（「愛」と「嫌悪」）は欲望、喜び、悲しみのほかには一般的情念を生み出さない⁽¹¹⁾」ゆえに passions-mères と呼ばれるが、対象の種類や数にまどわされることなく、対象が主体とのあいだにもつことのできる関係を重視して、そのうちの主要なものを検すればこのような結論に到達できるのだろう。この点はデカルトの強調しなかった事項であるといえる。つまりそれは、認識論的観点からすれば一歩の前進といってよいものだと私は考える。

「愛」と「嫌悪」とが「驚き」のあとを引⁽¹²⁾きつく最初の情念であるとマルブランシュは書くことによって、デカルトがした並列的な列挙の印象をおぎなったが、対象と主体とのあいだの、また対象と主体の愛する存在・事物とのあいだの関係が見いだされなければ、「驚き」の情念は孤立した、いのちの短い、前情念的なものとして終わるのである。しかし、対象が「よいもの」として表象されれば「愛」が、「わるいもの」として表象されれば「憎しみ」が起こってくることはデカルトの

明快な説明によってすでに明らかとなっているが、対象の良否、すなわち対象との関係の有利さ・都合のよさが認識により、あるいは感覚的判断により示されるならば、愛の動きはその Admiration の対象にまでひろがることを示すことによって、マルブランシュは Admiration 情念の孤立を救っているように見える。

しかしながら、Amour が単に数個の本源的情念の一つであって、他情念とのさまざまなからみ合いのなかでその特殊な意味を発揮するとはいっても、もっと根本にさかのぼっての意味づけがほしいという気持ちが私たちにはある。マルブランシュは神学をもち出すが、Amour がある根本の線から流れ出ていることを示した。すなわち、あらゆる自然の動きは、自然の創造主の印象にほかならない。彼のためにのみ行動し、彼の方にのみわれわれを向けることのできる創造主の印象なのである。だから、魂（精神）の真実の動きはつねに必然的に「よいもの」bien への愛⁽¹³⁾ということになる。「情念」とともにマルブランシュの重要な哲学概念である「自然的傾性」Inclinations naturelles というみなも⁽¹⁴⁾とから流れ出るのが、根元的な Amour であり、また下流において「母情念」とみなされる Amour であると考えられるだろう。

そう考えてくれば、「愛と嫌悪とはそれゆえ、たがいに相対立する passions-mères である。が、愛が最初のもので、主要なもので、⁽¹⁴⁾またもっとも普遍的なものである」という見解は、デカルトよりも一歩進んだ観念をマルブランシュがもっていた証拠の出発点と考えることができるだろう。デカルトにおいては、Amour と Haine はより単純に、より単的に相対立する二つの概念であった。Amour は、対象が「よいもの」として、すなわち主体にとって有益な⁽¹⁵⁾ものとして表象されたとき生ずるものであり、精気の運動が原因である魂

〔精神〕の情動であって、自己に有益であると思われる対象に意志によって魂を結合させるようにし向ける情念⁽¹⁶⁾であり、反対に Haine は、対象が「わるいもの」として、つまり主体にとって有害なものとして表象されたとき生ずる⁽¹⁷⁾ものであり、精気の運動によって起こる魂の情動であって、自己に有害であると思われる対象から離れようと意志させる情念⁽¹⁸⁾である。結合と離反という、力学的単一性にマルブランシュは必ずしも同意はできないが、それはやはり情念分析に複雑さを見いださないわけには行かなかった、フランス十七世紀後半の時代的空氣の影響のせいだったのではあるまいか。

だから Aversion の彼による説明は、Amour に対立するというよりは、それから分岐して行く。Admiration につづく情念として Amour を説明するとき、対象が主体にとって、また主体と結びついているあるものにとって有利であると、感知あるいは認識されるならば、それは「驚き」の対象のうえにひろがって行くのだ、とされる。この場合もし対象が不利・有害なものと感知あるいは認識されるときは、情念の動きは主体の内部に限定されて、対象に向かってひろがって行くことはない。この、自己に適合しない対象に近づいたり、それと合一したりすることを拒否する魂のありかたは、一種の否定的な意志の動きであって、自然の動きへの抵抗である。その動きの効果を無化する抵抗だといえる。反対に Amour は自然の動きに身をまかせることである。自然の動きはなんらの抵抗も受けないのであるから、それが勝利に満ちたものとなるのは当然⁽¹⁹⁾であろう。

そして Aversion が Amour と反対でありながら、それから離れることができない理由として、マルブランシュはきわめて論理的に見える説明を加える。すなわち、もし対象の mal が bien の欠如であるならば、mal から

の離反・逃走は bien の欠如からの離反・逃走だからである。つまりそれは、bien に向かうことであるのだ、⁽²⁰⁾と。二重否定の文が結局は肯定の文とひとしいといったような感を抱かせる説明であるが、効果的なものではある。

「本源的情念」 Passions primitives

Admiration が「不完全情念」であり、Amour と Aversion が「母情念」であると規定されれば、残るは Joie, Tristesse, Désir の三つだけとなり、デカルトのいわゆる六つの本源的情念は三つのそれに減少する。そして個別的な情念はすべて、これら三つの本源的情念によらなければ構成されることはないのである。そして個別的な情念の数は、「それらを引きおこすよいもの、あるいはわるいものについての、主たる観念に、付随的な観念が多くともなえばともなうほど」、あるいはまた、「よいものとわるいものが、われわれとの関係において詳細なものとなればなるほど」、⁽²¹⁾増加・増大するのである。

こうして、三つの本源的な情念は bien か mal にかかわって、同等な資格をもって存在する情念であるから、「欲望」Désir は反対をもたない情念⁽²²⁾である、といった表現法——つまり「欲望」に「嫌忌」を、「喜び」に「悲しみ」を対立させた伝統を破ることへの幾分の弁解などは無意味なものとなる。マルブランシュにおいては、「喜び」「悲しみ」「欲望」は時間性の構図のなかに並列されるに至った。

bien あるいは mal の主体とのかかわりかたをそれぞれ詳述すれば、まず一般に bien の表象はまだ定まらない愛を生み出すが、それは「幸福であろうとする自然の欲求」⁽²³⁾désir naturel d'être heureux であるところの、「自己愛」⁽²⁴⁾amour-propre の結果であることは当然といえよう。そして bien についての個別的な観念が Amour を三つの種類に分ける

のである。

- ① 「喜びの愛」 Amour de joie, bien をいま所有しているという観念から。
- ② 「欲望の愛」 Amour de désir, 現在は所有していないが, bien の所有が期待されるということ, いいかえれば, 所有が可能だとの判断から。
- ③ 「悲しみの愛」 Amour de tristesse, bien を所有していない, あるいは所有する期待がもてないという観念, ある他のものを失わなければ所有が期待されないと, またそれを所有しているが維持できないとの観念から。⁽²⁵⁾

同様に mal にかかわっての個別的な観念もまた, Aversion を三つの種類に分ける。mal とはすなわち bien の欠如であり, 苦悩であり, bien の欠如が苦悩を生ずることがらである。

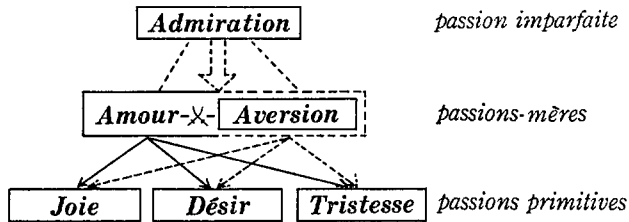
- ① 「悲しみの嫌悪」 Aversion de tristesse, 苦悩の現実の感情から。
- ② 「欲望の嫌悪」 Aversion de désir, 苦

悩していないか, 苦悩する心配がないという観念から。

- ③ 「喜びの嫌悪」 Aversion de joie, 苦悩していないか, 少しも苦悩する恐れがないか, ある大きなよい報いを受けなくては苦しむ恐れがないか, 苦悩から解放されたと感ずるか——それらの観念から。⁽²⁶⁾

これらを一括すれば, すなわち「bien が現在あるか, mal が過去のものとなったとき, ひとは喜びをもち」, 「bien が過去のものとなったか, mal が現在あるとき, ひとは悲しみを感じ」, 「bien と mal が未来のものであるとき, ひとは欲望にゆり動かされる」⁽²⁷⁾のである。

以上の考察から結論的にみちびき出されることは, スコラ学派とデカルトとのあいだを, 一見すれば折衷したかに見えるマルブランシュは, 情念を独自の時間性の構図のなかに配置し, それを構造的に立体化した功績が認められるということである。



マルブランシュの情念分析についての概念図

注

1. *Passions de l'Âme*, Art. 69; Descartes: Œuvres et Lettres, Bibliothèque de la Pléiade pp. 727-728
 2. Ibid.: Art. 53, p. 723
 3. Ibid.

4. *De La Recherche de la Vérité*, Tome II, Livre V, Chapitre VII, J. Vrin, 1967; p. 119
 5. 6. Ibid.
 7. Ibid., p. 87
 8. Ibid., pp. 87-90
 9. Descartes: Art. 85; p. 735
 10. Ibid., Art 87; p. 736

11. Malebranche: p. 118

12. Ibid., p. 136

13. Ibid., p. 89

14. Ibid., p. 137

15. 17. Descartes: Art. 56, p. 724

16. 18. Ibid., Art. 79, p. 732

19. 20. Malebranche: pp. 136–137

21. Ibid., p. 118

22. Descartes: Art. 87, p. 736

23. 24. 25. Malebranche: p. 139

26. 27. Ibid., p. 140